

めだか談義

メダカ発、世の中つれづれの記。2025・04・24



昨年12月の「竹灯りとおしゃべりの会」へは70人を超える皆さんが桑原の田んぼに集まりました。サポーターの会からの参加は12名ほど。50人を超える人が足を向けてくれたのです。赤松大介さんをお願いをして、「食」や「子どもの教育」「環境」「福祉」などの社会活動に取り組んでいる市民グループへ声がけをした結果でした。



パートナーシップミーティングに出席するなかでいつも感心していたのは、他のグループの事例を聞くにつけ、アタマの下がる思いをしていたこともあり、我々のピンポイントの環境保全活動と同様に、皆さん、食の安全、不登校児童対策、生活困窮者支援、ハンディキャップを背負う人の介助などなど、それぞれのテリトリーでほぼボランティアとして活動を重ねていらっしゃる。こうした皆さんと話をしたいと思ったのです。それぞれの活動には限界もあるので、なにか共有できる何かを見つけ出せないものかという思いでした。ただでさえ小さなグループではタコツボ化現象も起こりやすく、自分たちの活動こそ正義、どうして周りは協力してくれないのかなどと負のスパイラルに陥りがちです。お互いの活動を認め合い、尊重し、敬うことで、新しい道筋を見出していく起点になればの「竹灯りの会」だったわけです。SDGsのゴールでもある「持続可能な地球」ということは概念として誰もが理解出来るとしても、もっと切実な毎日の暮らし、ここ小田原での生活に充足感を見出すには、というのがホンネなのかもしれません。

1月に開催した「餅つき大会」には「竹灯りの会」同様に50人以上の皆さんが参加してくださいました。会を重ねるほどに皆さんとの親密度も増していきますね。これからはパトロールや草刈、藻刈、ザリガニ駆除などの会の基本的な活動の案内もしていくことにより多くの手によってメダカ生息地の環境が守られていく、つまり会員であることを前提とせず誰でもが気軽に環境保全ボランティアの輪に加われるような会にしたいと思うのですがいかがでしょうか？逆に言えば、他のグループの活動、例えば、食の安全を考える会が有機野菜の栽培に取り組んでいるなら、我々の会から希望すれば気軽に参加できるような関係づくり、つまり活動の情報交換ですね。これを実行出来ればいいなあと思います。

「竹灯りの会」も「餅つき大会」も第1歩にすぎません。「あれ、サポーターの会の人が少ないなあ」と不思議に思われた方もいるかもしれませんね。赤松尚子さんが中心となって昨年秋から開いている（不定期）「放課後めだか」（桑原の田んぼ テラスの脇で）もさまざまなグループの皆さんが桑原の田んぼの景観を楽しんだり、水路の生き物たちに歓声をあげながら「おしゃべり」を楽しんでいらっしゃいます。

「環境」「食」「教育」「福祉」・・・生きていくために最優先させねばならないこれらの社会課題に取り組む小さな市民グループが互いを尊重しあい、協力し、「幸せで充足した暮らし」を見だし、未来に繋げていく、小田和正が他のアーティストの音楽に敬意をはらうことで音楽業界は成熟するという信念にふれたことも実はぼくのなかでヒントになりました。

他の活動に敬意をはらう、サポーターの会の中だけでギシギシせずに門戸を広げてみれば良いのではないかとことです。それぞれの小さな活動が点だとしたら、それを線で繋ぎ、やがて俯瞰してみると面になっている、そんな夢想もしています。

そして、その大きな面を緩やかな大きな円で囲んでみる。その円の表現するキーワードは「幸福」なのか「いのち」なのか。皆さんもご意見もお聞きしたいです。

「地域共生循環圏」あるいは、「一円融合」？